vol.20　フリジアンスケールの使い方について　～その 2～

では、vol.20、始めていきましょう。

前回、スケールの主要ポジションを確認したので、今回はフリジアンのコード進行について考えていきます。

まずは毎度おなじみの、「モーダルなコード進行を作る時のポイント」を確認しておきましょう。

1、狙っているモード・スケールの、トニックがルートになっているコードをトニックコードとする。

2、そのモードの特性音を含むコードが、主にトニックへの解決を促すコードである。

3、そのモードの特性音を含むコードでも、他のモードや調性を示唆するコードは使い方に気を付ける。

4、構成が「Xm7(♭5)」になるコードは使用を避ける。

5、そのモードの特性音を含み、かつトニックコードに(音程的に)近いコードほど、トニックへの解決を促す。

6、モードの進行では、隣り合ったコードへの進行が推奨される。

この 6 点を基本に考えていきます。

それでは、以前のテキストと同じ様に、まずは C キーのダイアトニックコードを E フリジアンの観点から見てみましょうか。

※E フリジアンのダイアトニックコード(4 和音)

Ⅰ、Em7
♭Ⅱ、FM7
♭Ⅲ、G7
Ⅳ、Am7
Ⅴ、Bm7(♭5)
♭Ⅵ、CM7
♭Ⅶ、Dm7

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

フリジアンスケール(モード)の特性音は m2nd(♭2nd)でしたね。
(※E フリジアンの場合は F 音)

上記のコード群の内、F 音を含むコードは、FM7、G7、Bm7(♭5)、Dm7 の 4 種類で、この内、Xm7(♭5)は除外するので、4 和音からは実質的に 3 種類になります。

次に、ダイアトニックコードをトライアドで見た場合は、G7 が G になり F 音が抜けるので、F、Dm の 2 種類。

※E フリジアンのダイアトニックコード(トライアド)

Ⅰ、Em
♭Ⅱ、F
♭Ⅲ、G
Ⅳ、Am
Ⅴ、Bm(♭5)
♭Ⅵ、C
♭Ⅶ、Dm

よって、フリジアンの特性音を含むコードは、両者を合わせて 5 種類存在することになりますね。

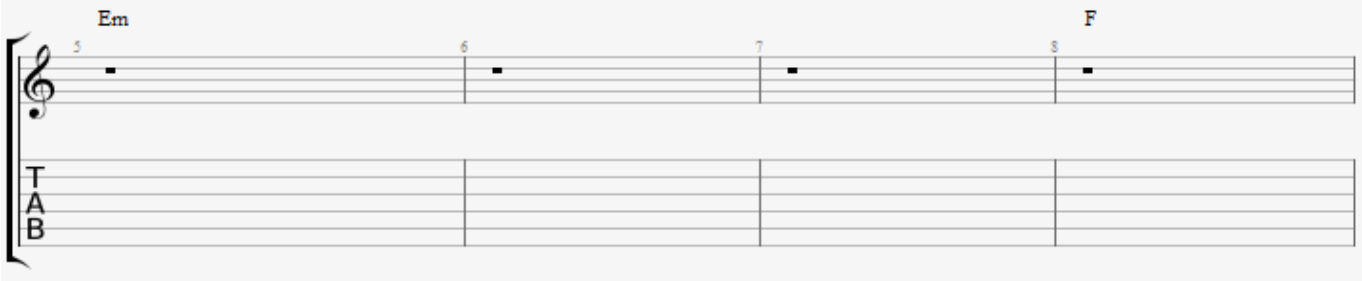
以上の事を踏まえた上で、コードの使用感をまとめるとこんな感じです。

1、Em(tonic)、Em7(tonic)
2、F(♭II)、FM7(♭IIM7)、Dm(♭VIIm)、Dm7(♭VIIm7)
3、G(♭III)、Am(IVm)、Am7(IVm7)、C(♭VI)、CM7(♭VIM7)
4、G7(♭III7)

これらの内、上位に記してあるコードを中心に使い、トニックに解決すると、フリジアン的な響きが出てくる、と。

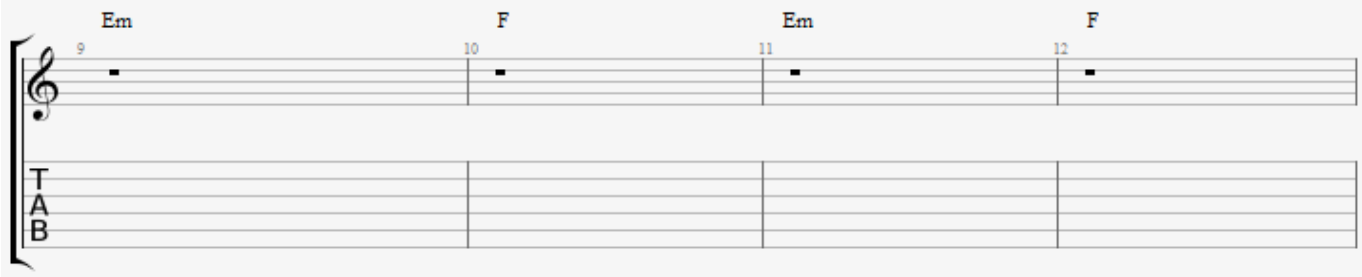
では、実際に進行を作ってみましょうか。

譜例 1

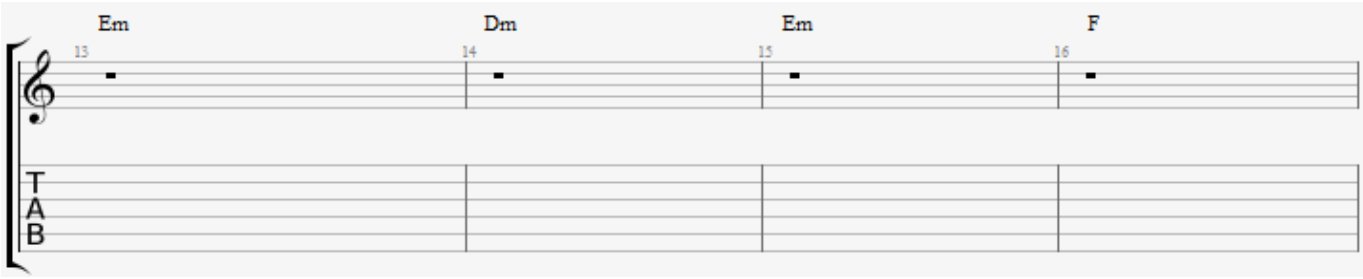


Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

譜例 2



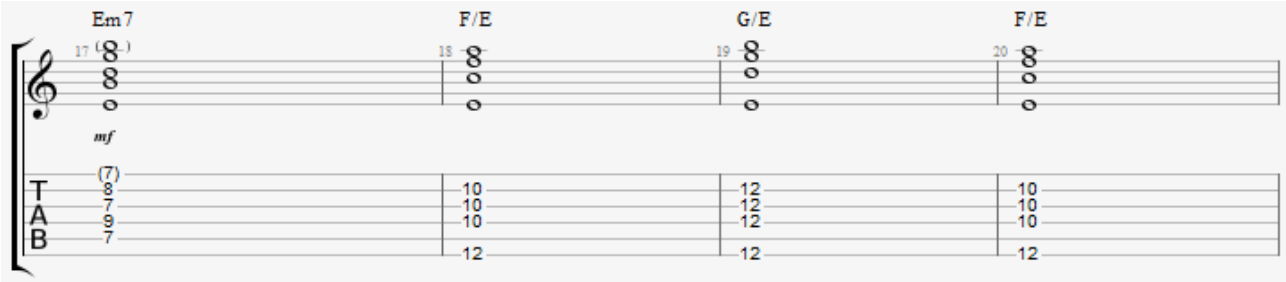
譜例 3



上記譜例では、コードが全てトライアドになっていますが 4 和音でも可能です。

他のモードでも見てきた、トニックペダルの進行も作ってみましょうか。

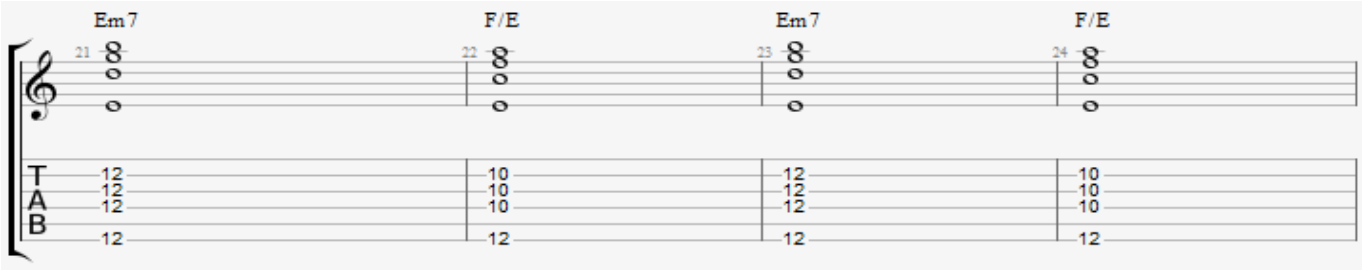
譜例 4



良く見るとわかりますが、G/E は構成音が Em7 と同一です。

なので譜例 4 は、例えば以下の様に弾いても良い事になりますね。

譜例 5



こう言った、コードネームは違うけど実際の構成音は同じ、と言うコードヴォイシングは

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

まとめて覚えておくと非常に便利です。(※F/E も内容的には FM7 ですね)

と、言う事で、今回は以上になります。

モード奏法の基本的な考え方は共通で、それらは過去のテキストで解説してしまったので、どんどん内容がスッキリする様になってきましたね。

結局は、(ほぼ)同じことをやっている状態なので、モードの扱い方にも慣れてきたのではないでしょうか。

モードが分かると、通常の調性音楽の理解も深まり、作曲系のスキルも上がっていきます。

何度もお話ししている事ですが、全ての知識は繋がっているので、それぞれの関係性を考えながらマスターしていきましょう。

では、また次回。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved